フクロウのすむ森づくり
～身近な自然を次世代に～

県立四日市西高等学校の自然研究会は、2015年から鈴鹿山麓を中心として、繁殖支援、調査研究、教育啓発を柱とした「フクロウ保護プロジェクト」を実践しています。今、彼らの活動は、自分たちの活動から地域の活動へ、そして、大学や企業、地域の市民団体との連携を深め、今後のさらなる展開を模索しています。

五月初めの夕刻、静かな森の中で自然研究会（自然研）の部員らが生態調査の準備を進めています。彼らが設置した巣箱で生まれ、間もなく巣立ちを迎える2羽のフクロウのヒナに発信機をつけ、巣立ち後の行動範囲を調べようとしています。

巣箱は地上から約5メートルの高さにあります。親フクロウがヒナを守るために攻撃してくることがあるので、皆ヘルメットをかぶり周囲に細心の注意を払っています。

そのような中、一人がハシゴを静かに登り、巣箱にそっと手を入れ、2羽のヒナを地上に降ろしました。

毎年春、自然研では新たな研究が始まります。

【注】フクロウの捕獲については三重県知事の許可を受けています。

【お話を伺った人】

県立四日市西高等学校
自然研究会 顧問
丹下（たんげ） 浩（ひろし） 教諭

2015年より顧問。理科教員・フクロウ保護研究家。15年ほど前、ある先輩教員との出会いから始まった野鳥観察。すっかりその魅力に取り付かれ、野鳥を通して自然探究することがライフワークの一つに。

フクロウ保護プロジェクト

県立四日市西高等学校の自然研は2015年から「フクロウ保護プロジェクト」を開始しました。この活動には3つの柱があり、フクロウ用の大きな巣箱を設置する繁殖支援活動、フクロウの未知の生態に挑む調査研究、そして、フクロウをシンボルとした地域の自然環境を守ることを目指す教育啓発活動です。

フクロウに着目したのは、生態研究の対象動物としての魅力と、三重県で準絶滅危惧種に指定される希少生物の一種を守るという意味があるからです。

フクロウは、古くから多くの人に親しまれ、里山などの身近な自然で生活してきました。現在も地域で人知れず生き続けています。夜行性のために姿を見つけることは難しく、その生態のほとんどがベールに包まれています。

一方、フクロウがすむ森には他の希少生物も生息しており、生物多様性が残された場所が多いのです。フクロウやその生息環境を守ることは、地域の豊かな自然環境の保全につながります。魅力あるフクロウをシンボルとして、より多くの人に関心を持ってもらい、この活動の輪が広がることを自然研は期待しています。